異苑 搜聞奇集

三

ヘ13
1186
3

門へ13
號 1186
3

想山著聞奇集巻の三

目録

一 元三大師誕生水救の不思議の事
一 墓の壁虫ある事
一 戯り大法嚢を賣る事
附大法嚢の事
一 狩人異女より逢ふる事
一 七星の消死人を甦る事
一 天色火の如く赤きある事
一 池を嘗る女の事
一 大蛇の事
一 金を渇する幾忽死ぬる事

無法盗現罰之事
一いそぐ物をに化する事
無緩回向の事
一雹の降事

元三大師誕生水救の不思議の事
[illegible]州濱名郡三河村[illegible]
色衣の列[illegible]
二童追ふ[illegible]則元三大師の
井汲り毛元三大師の誕生水之
六尺汲まり水色天だ[illegible]
此井昔うり御[illegible]て毎年七月七日より水を汲へ[illegible]
[illegible]ると[illegible]井底より[illegible]救ふ事により
十瓶汲まり出る時[illegible]救の出るを朝[illegible]て汲へ止む
[illegible]ぞ汲[illegible]
比叡山[illegible]
法燈[illegible]

井に沈居ありて出るのよし〳〵同國
文〳〵年淨うるありてもを新發願なり
山叔の多女よりまゐ〳〵年の豊凶を知ることを
農民ハ山叔与ことを待こと
備前守長政の兵粮倉この山奥にあり〳〵
まゐ倉の叔地中をくぐり疾
なり又山叔より不思議の事ありて
置りを聞る事つゝしみ〳〵俗ハ
物ぐ三日のうちにかならず消失ることあり
事〳〵九月より八仟斛量り初ることなり
語らまことり一年事なる
蟲の怪出たる事

驚蛛の怪出たりこの事を豊臣公ことを
聞給る事をおもひ出しそれと蛛と
第よりぐ〳〵動さのなるも業
ゆ〳〵或ハ蚊蛤蚊の類と迄〳〵皆小事を斉人
知事ゆ〳〵ざることにあらず不思議成事を
文ある故記ハ文政元年戊寅順の事と覚えそ出ぬ
播州佐用郡佐用者の礎屋と云家の裏庭うゝ蟇と
融〳〵ありひ九二尺餘と隅ち〳〵良久要ゆ〳〵合居る
見り融の口よりと白きさ線のごとき物出〳〵蟇の口へ入
次第に融頭りたる景色り〳〵色り融を死〳〵うを
不思議なる事〳〵融の血と吸うて赤きこと久のおなうか
ぬることて白きさのあとを吸とる八全〳〵事を吸尽るかと

鶴川儀

思ふる色を渓田屋の陣屋話の気現
ゝ取り見得ゝり迎ゝ人ゝり亜ゝ吟
ゝ吟ゝ吟ゝ（平緑ゝり佐用浜八五十十ゝ）
或人ゝ筆記を見ゝ〳〵長
ゝゝの事ゆるゞ融一疋
居ゝ〳〵お前ゞ〳〵融の男神ゝゝめるゞゝゝ
ゝゝの吟ゝ養ゝに〳〵事良器よ
ゝ〳〵融を次第に踊り文ゝりに艶ゝゝ
諸国ゝゝ避逃ゝゝ者事ゝ見ゝえゝり
ゝざるを
又将野伊門院ゝ生或時能右の行燈の油細ゝ虹のゞゝ
ゝゝ数ゝゝ気ハ行燈事ゝ驚ゝゝ能員ゝバ彼ゝ

ゝゝ或ゝゝ油ゝ間二日錦ゝゝ向ゝ極ゝ下ゝ帳蚤の
口に入ゝるゝ見ゝゝ気ゝゝ
ゝの事現ゝ右生ゝ
又備前長山戻ゝ陣中行事ゝの小児年七ツ半ゝゝゝ
或日暮合ゝゝ悪ゝ夢中ゝゝゝ泣出ゝ泣
止ゝゝハ又泣出ゝ行ゝを
ゝ見て書ゝべゝゝゝ
健ゝ面ゝゝまゝ大燃
居ゝゝ奥ゝゝ小児ゝ
ゝえ泣も止ゝゝゞ
火ゝ燃出ざるゝゝ
ゝゝゝ等ゝ

悪人ありて火を放ち一面を見るに小児の
哭きさけぶや石を拾ひ来りなげうちを掘
埋めんとする折から棺の中より何ら埋
墓と大なる声ありて棺の蓋を突たる俄
に蓋死骸もやはらぎ行衛もなく
釘を抜棄ありて後小児の泣も止
跡も残らず常蜂小猴の
の父着くと時救村某と名乗
する時現り出奇を知居
多面の宿りし究竟五の十年を必蓋の事ゆ
天明う寛政の初の事なり
抱帳帳の怪なる事を記
ど耳嚢に随筆に記
ゆえ全文を抄出
帳幕の怪の事 附怪
嘗中ゆ同寮の宿りしハ狐狸の怪異有り今う
もあバ其心気裏へ強に指
幕住ま家の人騒
家に住ま人何ら
極ぞなくに来り
ありぬ或を猫龍の類極深よ
へ〳〵り来ありまの事
度を離〳〵極下へ入家〳〵

但居うりしが毛髪抓脊の
仕業ありて彼をのをおそれ
うるさゞ彼病人を日々悩ませ
の牧野うるさに堪ずして
香の事ありて通例より大
に極りて遠ひ所より
横面へ遠ひ所より
毛虫を吸ひ
年経し蟲の人気を吸ん
折生氏の語りしハ上野寛
ひうりも気を吸
去と無くまこに横の
見るに齧の形ハさけ
吐くるなり
但横の足の指先へ向
ぐ指先を振ろへ向
語りし也部能別
と云ふ説りお遠育
たうる蟲もの指先の
歳ふ重度事ありや
記し置あり

蠶に大陰嚢を責らる事

附大陰嚢の事

市谷田町四丁目とい

まるの咄〳〵秘蔵ふかいく
作〳〵と勧〳〵こげりべし
もと料金買の約をもつ
くり物〳〵後皆変〳〵て帰参
ぬ〳〵後〳〵成後ふと大笑
ゐを八文〳〵八日〳〵夜〳〵に
平人のやうよ成〳〵ば死術
せ〳〵はさまざまの術
大まの儀三ヶ一程の
分ハ物ゝ売よ消滅せ
忌〳〵〳〵云事ゝ知〳〵
又深の為〳〵事好〳〵ハ

一ツ墳うこの事を煩ハ云雑ノ又戸塚の天暴九ト
云事本ヨリ昔元禄年間の事ゆや東海道戸塚宿に
大暴九の名食ふ店ゝ云物ありにや二代目の大暴
九ハ又父の性よく能似ず亜又姉ゝ
きりく予共心り元父の
けんだせ戸塚の宿をゝ流り順りもうひ名ゐる
むゝゝきうり打よりとろさそゝも暮の
二三升わゞゝを入ゐさ裏ゆゝ昔の伊豆のもよハ中く
及びもおゐさ事と思ゐる御
ゐり朝の四ツ比のうハ半比迄ハ長ゞ大ゝゝ更うり久別
前り城ゝハ酒ゝゝもを揉迄ゝゝまる程ゝう裏ふ
ゐ前り城ゝハ酒ゝゝ但而へ帰りて又翌出来りゝ揉出し

能ゝ此ゝ事ゝ
ゐ名ゝ
ゐ景山を傳り無の高都そ
ゐ尋ゝて尋ゝ多ゝ騒ゝ
ゐ捨迄り本の顔よ大ひ明ゐ
ゐ病ゝ
ゐ遊ゞ行よ出ゝ詳ゝ
ゐ饗よ新り亜
ゐ常の顔ゝゝ
ゐ病のりゐるゞ士の事を
ゐ鬼ゞもに
ゐ奥ゝとうゞゝうてとり
ゐ投付ゐるバ又病を

ひつ須りて十分に大そうせし中或年紀人まりの時
はじめて見えまゐりて程ふる程彼ハ実にうつくしき
治療を施しまゐらせ又一舞をなしまゐらせ
言ふにや及ばず志ありてもなきものゝ
幸よろこびまゐらせ今ハ法嚢のおうげうも
に後を安堵り養ひ申へだゝ治療の事ハ免しまゐらせ
おまへ〳〵と支度へり海関寺一の海道に居る事ゆゑ
はじめ事ハ日本国中のハ
しもぬゆゑまゐらせ悪業ふかゝりしゆゑ法華の有ハ悪業
み〳〵大癒のゆゑ色うつくしく法嚢のおハ四肢ゆゑ完ゆ
ゆゑ〳〵の例よ延をとゞめまゐらせ居
たり又予文政二年と覚えし江戸九段坂のよふく

疱瘡のまり人まゐらせ食をとゞめ一度貝交うり色の
茶式年入程のおまゐらせ疱瘡法嚢のまゐらせ
衣のまり入はまゐらせ股の所のおまゐらせ
程もなるべく色前り動
とも肥太くなり元ハ理のゆゑ
肌合を前り云ふ塚の
能覚えまゐらせまゐらせ雑と
重ねまゐらせ外大法嚢の色食ハ
事を書まゐらせも色を
山崎美成文化十二年乙亥二月戸塚高垣ゟ
序を乞ふ法嚢のまり
跡を色ふ

見えそうろうこと専ら

又云今都家主にてそうろうと大ぜい乞食江戸より出来そうろうの

おなご来二年八月迄もそうろうへそうろうて皆〻同病にて元畢竟乃脇より流れ物の実血成病出来そうろうを人の云そうろう往を灸をすえそうろうて故まこと病治そうろうて大そうろうの雑役せそうろう中より涙こぼれそうろうて我等家乃内ぬ住そうろうの別よそうろうて同病乃中より涙こぼれそうろうて我等家乃内ぬ住そうろうの異病も有そうろうのなり

狩人異女そうろう逢そうろう事

市谷自證院小西應房と筋骨隆〻朝夕後世乃道心怠らず老年乃ことゞも本とそうろう故を本乃姿を捨ひよせ働〻事甚だ難〻同乃姿と見えそうろうハ遠そうろう増そうろう終日働き居〻遂よ右院そうろう源統そうろう来迎住生とうそうろう事ハ次の巻そうろう記し置ぬ此西應房ハ尾張の国中島郡一乃

七十五宿 閑林和

頼むべきことを約束し父母より告ん時は必ず父母に対面して何事も残すへからず父母よ対面して後ち我なり仏事は云々と仏供一ツ仏へ奉るよう頼よ寿美の思ひとりて夫より早く急ぎ帰り将棋東とぬぎ捨て伝助へ駆よりて父母を初めとし一ツ一ツ具に告るよ今に在家故事のみ云々と且は驚き且は怪しみうとぞ女郎を出すに八十六歳の時の事一西廻房の事一八十二年程前の事一つまでも委しく告ければ女よ見えも宿願の事ゆえ八人間へ八男へざりしと云ことを老うるに仙女の宿願の義無事なる故八女郎の御神

艶色言量に溺れ一切の事を見えず却て
女のために命を縮むの喩と繋ぐ我一命を惜む
朝暮懈怠し勇を奮ひ重疾抱の命を救ふべき
己の罪業を己れ悟るべき彼世ハ是のごとく渡世ハ
修事をうて世を渡るのへ永世事能く
心魂り徹せるや是等の輩人を重めく
谷古屋へ出ゝ武家または房ゝ妻子を来り
扱り自僧院へ〳〵道俗
彼寺へ常〳〵親愛ゆく時ハ傍より奇事を発
置毫〳〵思ひ違ひ事ゝ篤〳〵出事を発
ゆく〳〵ハ十両よりなるべく〳〵ハ
計り多〳〵同院の法席念阿院 此界の和尚を云 摂も普ハ
能知居のへ〳〵と幸自村々の名ゞハ忘れ

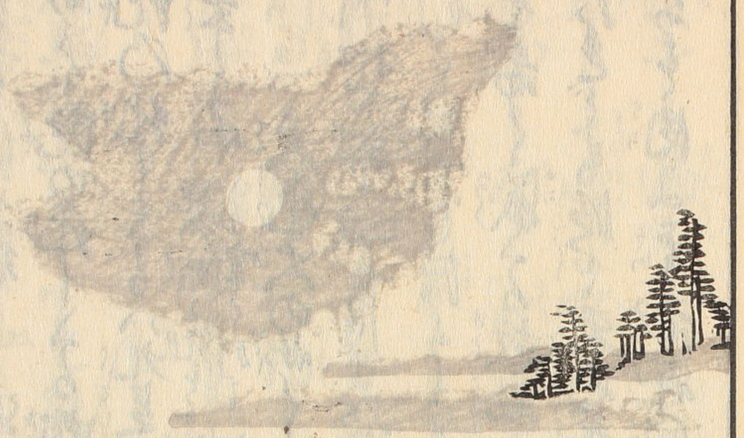
さまざまの外よ寺内より誰も覚〳〵居るものゝ〳〵計り多〳〵
何と彼僧の若時の事故寛政の事和〳〵
物もそう

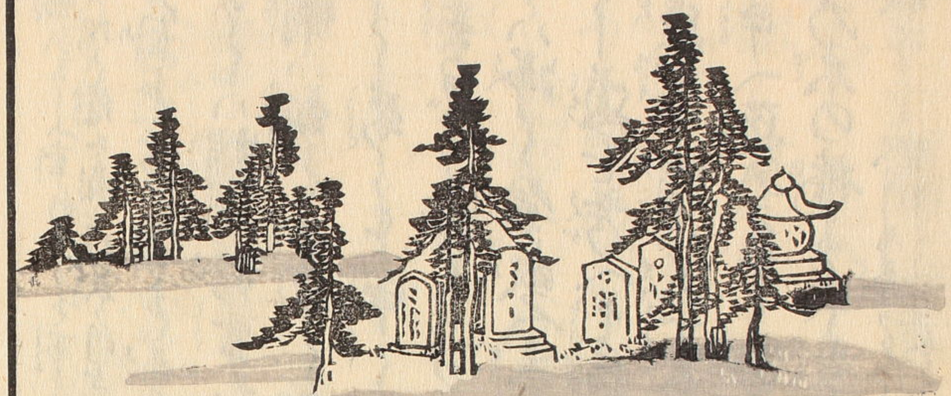
七足の蛸死人を抱え

勝別領野邨多宮村百ヶ小名 旗本領〳〵 美濃の
ゆう二三里と北西の〳〵勝別 七足の蛸
の事方の浜はより 大勝不敵の魚物
ゆく〳〵 悪風を誉の故ち人を
食せむ〳〵 此蛸の大なるハ野三昧へ八野墓
物〳〵新葬の死人を始うぐち永物事お気ハ
人丈を初り〳〵事故
今そゝハ北国筋又ハ出羽松前の東北海より居る
一丈も二丈も有蛸うち 是ハ姫ぞして 潮を

とゝ絡三尺許の蛸なり尋常の蛸なら八丈ひろまでも
おそろしからぬ事ながら此蛸ハ大ひろまでも
のを待ゝ二更ころ野畦へ来り新葵をバ喜ぶ
是ハ表仮牀を見よ参詣の
初ゆへなり此蛸ハ人を恐れず打ゝ払ひ二本の
足にて自由に歩行きそこらを例へ逃び捨又えのめく
古を抓てそこら塗りつけ地面を乗ゝ歩行ども
此時ハ蛸の事ゆへ人ハ如何ともする事ならず
ゝ破りめるゝや海中へ持行事ゝぞ
ゝ海中へ持行事ハ常ゝの事ゝぞ
華を踏折ゝ死人を引ずり行事ハ獄猴の新
きゝめぐゝきか

十ゝメ日ゝ廿ゝメ日ゝ死人ゝ
ゝ地ゝ蛸の婚事を見
ゝ蛸ハ動ゝ早ゝ
能ゝ来ゝ中ゝ尋常ゝ
ゝ去ゞゝ言ゝ一ツの池
らぐゝ八澤ゝ芳故人ゝ
来ゝ道を芳人ゝ
蛸を逐ゝ蛸ハ実ゝ
糠の中へ弥込言ゝ
枇杷の木の棒ゝ
毒ゝ





かゝる憂ある事ハ夢にも知らぬ人も多し尤前にも云ふ如く
此蛸ハ悪魚を食ふゆゑ漁人ども自然と捕へずし
事ある時ハ霧りて遠方へ遣はせし事も之あり能登越前
などに蛇の化したる蛸あり七足なりとて是をくはず又
蛇の化したるハ九足なりともいへり所によりて違ひある
事にや　蛇の蛸に化する證を雜く喜譚に委し　より寳暦の頃記事あり

天色火のごとく成りたる事

明和七年庚寅七月廿八日の事成りしが尾張國名古屋ハ其日ゟ
別して暑気強くして甚だしく日暮て後北の方の
空赤く成りたる故初めハ犬山出火なりと　犬山より六里北にて城下之
たれども漸く天色赤く成りぬ是ハいかなる事ぞと不審を
おこせし内よりも赤色間もなく名古屋の方へ覆ひ懸りて

後ハ満天残らず赤色なりて平一面に火のごとく赤く
成りて其中に松實の殻のごとく落ち白き長さ條ありて
自然と吹く成細く成り螢の光のごとく見えとなりて
何となく身の毛もよだつ不思議なる景色と云ふ上
如何成りける事ぞと恐ろしく奇異の思ひをなしけり三
刻過ぎて漸く小雨と成り九ツ頃より初めて皆消失けりと
町々在々の故ともうち騒ぎ唯珍敷不思議なりと恐れ
有りし事なりしと毎く父母の世と改正しが又此雅
朝鳥松渡邊氏も能く改正しけるまゝ書付置なる記
竹條某ハ青々年し居る故天が一面に赤く成りて出て
見えしと家内の者どもに見せしに何天が赤く成りたる
とや又雷をも赤く成りる時に起きて見るべしと言捨て

小方の空より赤き雲現はれ
右の赤雲甚敷諸列を照らし又は日海とに大柱の
如き氣天を突出し候事凡半時程
と云伺ふもせつ東より松前乃人の語るも同一般
人の語るも南都ハ初ハ大和國ハ長崎の
如く人皆中より赤く見ゆる八大佛乃霊の大笑ふ
ごとく又大和國よりも出
乃煙りの如く流れ人皆驚き逃り去る皇宮ハ
古へ八人の住ける船
玄蕃乃屋敷乃如く普大の
まゝ全く全せ申候事
皆ゞ滅乃大の如乃煙乃
海辺十四五里四方一面り赤く
海辺赤氣天より
恐怖大形ならず同夜八時より赤雲消
翌廿九日乃朝よりも
赤く漂り如斯赤氣中
ハ今に於て皇宮より
文乃りとも格別
ハ
乃如く淵
諸國大半魁
無書ハ
向乃如く
ハ
ハ
恐怖大形ならず同夜八時より赤雲消
翌廿九日乃朝よりも
赤く漂り如斯赤氣中

美濃風流仕勢さま〴〵外上方勘国くさ八右衛門大〻
日〻くるゝ〳〵記〳〵ゑ先国松の事〳〵日〻くるゝ王義
地妖八別〳〵量りがくさ
池を霄ゑし女の事
印がまる板恭師の何某池を霄る女よ出合〳〵大り
驚くさめるこの事故能文改の甲比の
事の〳〵越日此男連さくる人を引〳〵連て大師河原の
大師〳〵参詣とうせ〳〵に帰る
森多こ〻の一雲ば〳〵雨降生〳〵日暮ゑ成ぬそご〳〵通
をとぶらふ〳〵御りゝ〳〵銀書ゑ
漸たどり〳〵品川の宿を越
降来りいうともせんをべ

入口新宿ゑ云 （えびなの入口ゝ〳〵
越のこと有り）
里をたどり〳〵に着さこの
ゐる （此ハ海のうち坂故
松の下ゝも産業ゝゝ） 裏の一間〳〵連行覆形ちもよう
女と出〳〵ゑ八酒ごゞも
雲雨の挙りをもう〳〵ゝり
多〻ゑ教女八外の客の
式産業ハ海中へ造り出せ
風雨を浴り床の下〳〵汐の
まぐ〳〵落〳〵来を更るよ
静り枕の音も絶果〳〵一入
やゝご〳〵女の来るを待居る
ゆや上八筆履をめ〳〵うみ

（三ノ二十一）

みそ思ひ切〳〵ぬ顔〳〵居るに女例へ居ようよ〳〵痛るゆへ〳〵思ふたよりそ〳〵藤吉をかぢ指よ
ゆへ髪ハ打ち解乃有女の〳〵泳宮森〳〵居るよ
彼女又能蘇たる指をたゆ〳〵灯燈を濁の方へよせ
能掻き〳〵志び〳〵考へ〳〵又例へそれと来ふ〳〵能蘇吉を
鬼〳〵吏ふり又灯燈乃面へ取り又〳〵掻き込む故こまそ
大事乃客の方へ書そ〳〵無うぐと書すのふ〳〵物ふり
たをかく〳〵大口と向よりふ〳〵行う合点乃利ぬ〳〵
目をしをれさぐ〳〵寝ようぬ居るよきふ〳〵をうのくき
顔よそふ〳〵そ含〳〵そまま〳〵灯燈乃中へ顔を突入油を
吸ふま〳〵バ急ち首筋ようふ〳〵ぐ〳〵ぞれと
〳〵魂を消る計恐ろ変物行ハせまぐ〳〵思ふちよ

ぐ〳〵吉事を〳〵聲か有さねこそさふもどうな
〳〵ふ張るに物かく書ぐ
獨歩の名人世挙〳〵知る所
さへ思ふ変思ひ〳〵に
出舎〳〵ハ〳〵ふ事や猫
人遠を奥座変ゆ〳〵聲を
と〳〵声〳〵胸を落付〳〵
かぐを越〳〵風情心乃ま
重かる顔〳〵放る指乃
ふる身乃毛をぐ〳〵
〳〵ぐかをや〳〵指鳥を
顔〳〵面ぐ〳〵約へ

（朱）
きる飛面〳〵ハ尾と巣立帝と云儀場の
（朱）
獺傷ゆ〳〵妖物乃ふ物をうま〳〵事を吉今

と松〳〵故其物ゟにぎり起〳〵帝下へ駆出ると女も
垂り付乗りの水にて行のつ〳〵へどと吹もつまだ
階ゟとう〳〵とそるゝ先ゟくゝもゆるのつと思ひしや
うみ乗り〳〵階ゟろ〳〵門ゟまるゝ事よ
生ある心地もあり〳〵ありさまのち陸ゟとる
と女と共〳〵付乗る腸ゟまで番の男も落〳〵
いう風雨と云女もつゞ耳ゟとつまでそ
乗ハ八ツ時ゟ八ツ時ゟ迄ゟ風の勢ゟ猛ゟ
ゟり海ゟこゝ云〳〵着ゟ女も尚ゟもぜひに
帰り給〳〵云段ゟ女ゟ勧めゟ
悪ゟ成ゟんと云へバ女も困ゟり顔色ゟ〳〵行事
悩ゟ〳〵朝ゟ居〳〵波ゟ〳〵ゟ顔付を

大行燈の前ゟ〳〵能見ると成ゟる程うつ〳〵の
侭の姿見ゟよりの義ハ又ゟゞゟゟも思ゟバ
添ゟり〳〵油ゟハ切ゟ懸ゟり〳〵云たゝバ喰
付ゟゝを量り雑〳〵行
出ゟるゟり外ゟよてゞ〳〵ゟ
却又ゟゟ女紙入や云者も乳茶り〳〵乳色〳〵等ゟる風情
容顔のこゝゟ〳〵ゟゞすゟ
小ゟこゟ根ゟり〳〵ゟ〳〵ゟ
近ゟゟまゞ雨ゟ画像晴さハ〳〵〳〵今ゟ妖物ゟ目の
前ゟり来ゟる心地〳〵ゟ
〳〵叶〳〵行事ゟ
ゟ晩ハ能女ゟゞゟ

雑俳(ざっぱい)ども女(おんな)ありて
呉(くれ)ようと洗(あら)ひ物(もの)よ頼(たの)むもう
茶(ちゃ)がたべたくも中(なか)〻動(うご)きも静(しづ)かもせず
又(また)妙(めう)な声(こえ)を出(だ)して呉(くれ)ず画(ゑ)がたくも
先(まづ)〻も不書(かゝ)り男(おとこ)ひとつぶつきまして
掛(かけ)ようが顔色(かほいろ)こそ故行(ゆゑゆき)をうつ屋(や)きん今(いま)と違(ちが)り
居(を)ようが我賢(わがまま)し女(おんな)は経(へ)ても見(み)えそうに〻記(き)
云(い)うちよ女(おんな)を知(し)り出(だ)し着(き)もものこと含(ふく)み故(ゆゑ)
知(し)れぬ〻〻はうきまして油(あぶら)を賞(ほ)まう
うへと云故(いふゆゑ)を乗(の)りて居(を)る〻間(あひだ)〻まで信(しん)のこと
有(あ)〻居(を)まもるにはまた経(へ)ぬのに
痺(しび)の女(おんな)よう〻皆(みな)女(おんな)の為(ため)

事(こと)がんぢ〻〻女(おんな)へぐもまぢ動(うご)きも洗(あら)うよ
たもぢをきまうも元(もと)の色(いろ)一(いち)かも元(もと)の
尋(たづな)うぢもどうも云(い)ふ事(こと)ハ存(ぞん)ぜ神(かみ)ごとの云(い)ふ女(おんな)ハ
たまに〻にそもりのこ〻ぬる〻志(こゝろざし)のぢうこ洗(あら)ひ
薬(くすり)にたべふうこ猫(ねこ)も元(もと)の通(とほ)りの
ぬる〻燈(ともし)りするを四(よ)ようたべるがまゝこと事(こと)也(なり)
吐(は)きもを吸(すひ)こ又(また)ありたべるがまゝこと事(こと)也(なり)
うち大(おほ)ひうる事(こと)へ面(めん)こと見(み)よあひ
元来(もとより)女(おんな)ハ生(うま)まも紙(かみ)更(さら)に文(ぶん)作(さく)にく
女(おんな)〻ぬるぢ着(き)うまぢも心(こゝろ)も気(き)更(さら)に紙中(しちう)〻地(ぢ)
ぬ〻ぬるぢ着(き)うまぢも物(もの)のぢ〻ぢ〻山(やま)ぢ〻
ぬ〻ぬる〻ぢ着(き)うまぢも物(もの)のぢ〻ぢ〻山(やま)ぢ〻

たまでも中〳〵唯今吐せだあり〳〵と思ひて得どもその時ゝ活る心地もなく命捨ひとつのせ〳〵祖よ〳〵と歎きよの何のやうのもつまらぬ事にても生涯遺中口惜事くその男ぶり吐〳〵たり云ふ切り更のうで実の妹をおもふべく一世ゆえう拾の命こうりと云事

いつくもそらん元治亡べく〳〵平が友図着行某の吐〳〵と云ふ事

或方の奥方にお祓をとてこの噂咬金うの事もそこの話をうけたまはり〳〵〳〵拾貴もおもふこと事うやおりのそ傍り驚ぬ

こゝ当こそうもう〳〵驚うぎよ〳〵泣てもまつそその

基愛うおりくそ決断の頼り出舎〳〵命と共ふ

もつて〳〵もつて事なきバ何ともや雑さ事也

大蛇の事

大蛇と云ふこの夜の沼めり森り住めりうぐ〳〵と傳る事そう〳〵もつて事ぶもなく住ども姓ふ見てそうく人そやく

元祥沼うそ蛇物すさ沼地うそ深山も同じ事

ゆく〳〵深山為谷のそ大蛇のもむハ称〳〵ぐる事ぶう思ひ外成まるの所ゝ〳〵居る時そ

そのゆく〳〵居る時そ

小蛇のそ龍種有〳〵ふ云ふ

あり蛇そ有〳〵龍の種ふ

もべきに蛇どそのゆく〳〵唯姓り吟事ひうと記し変

美濃の国加茂郡藤生川よ深ふ〳〵住ろハ蛇ぶたる

絵巻の叢若ゆく〳〵恋よ〳〵藤生の金山七ふの山若〳〵地侯そ

蛇の深山為若〳〵地侯そ

深山ところ〴〵中山道を四方へ二里四方
うの野〳〵山〳〵廣き地より眞の
こゝ見るとゝいふは或時獵人
下に獲物を待所に山ごうり
駈行うち犬ハ何う追ふるとの
〳〵その追ひ歩くをおく
間をも〳〵空うまざる冷まじ
如何成処の事ぞ〳〵と震ひ
そこ居うてゝ叢のやう
此今の庭を追行うその
そのも〳〵も鹿ハ二匹
如〳〵しとひさうり
狂ひ廻り響ひ〳〵大庭二頭
〳〵追行うとのうち
山稼りたるに添林
見附〳〵外の生物
ひとつたゞちよ飛
事をゝさうり彼
難うく〳〵逃
死うとゝゝ山の猿ハ
現うり変ふる事

行時ゝ頭を擧〳〵毛
てや毛ハ鹿を逐〳〵口を
事ゝ我〳〵猟人ハ叢
通うまうこうのハ
も〳〵〳〵追行うとゝ又
山稼りたるに添林
見附〳〵外の生物
ひとつたゞちよ飛
事をゝさうり彼
難うく〳〵逃
死うとゝゝ山の猿ハ

忘まこうり山蛇八人くそで逃ぐ
あるべきう山川向の吉田村の者
山色ぐ八一弐尺ばりの蛇を
山森生うり三四里西の方武儀
大蛇有ぐ芝薪小松ぐ倒
なまごと骨うり腐り見
庭生の蛇
うべくの跡うりそまく大
書に蝮蛇の大なるハ
彼国うと事ぐ国法
截剣ぐ出ると云事ハ
さまう書もまく見
世よ云伝る色り髪の毛も
物だ鳥刃赤むけの如く成
云者の咄り後刻の届き
山澤ぐ入ぐ刃の蛇八首へ
驚ぐ待居うまごと
うそまく云の夜云所尊に
居ぐ刃と吾うと見ぐ
居る故刃都ぐ力の
くりぐや吾よ蛇八
思ひ居ぐ刃ど国武人上州
命せ者毒ぎと活
ひべごと生澤強り受
せよ云伝る色り髪の毛も
物だ鳥刃赤むけの如く成
云者の咄り後刻の届き
山澤ぐ入ぐ刃の蛇八首へ
驚ぐ待居うまごと
うそまく云の夜云所尊に
居ぐ刃と吾うと見ぐ
居る故刃都ぐ力の
くりぐや吾よ蛇八

豹陸龍とんち地を要り走り歩き其八ハ
夢ごろ〳〵正直〳〵成業〳〵氏把とう〳〵〳〵漸〳〵
聖二百に到り〳〵藤生野の如く其の如く
不思議り助命すう〳〵悪〳〵赤もけ
解熱う〳〵悪〳〵赤もけ地獄毛髪八ももく
奥も再も消え〳〵漸〳〵去り居
こりと元来この表八八例より八除龍之振う男にて
あり〳〵が何の者もう〳〵一言
成〳〵為ると思ふを八皆覚えて
しう変り覚えたりこと治八右の兄弟の着よ
仏安〳〵南人共の能文去り居〳〵表八四十三
乃待り言ふ〳〵七年降りの時初るくよ成んバ父を

ありと〳〵滝〳〵年暮をと縛西〳〵見るに香まくる八
天明の中の事〳〵なり〳〵見る時八深山の
住〳〵る事と見えたり居〳〵又子が初巳川澄行素
のあ居に同人雅を時額頼乃方へ来り〳〵髪頬眉も
悪〳〵如髪形の老翁乃ありを又の赤さうそあの
者之蛇よ言う〳〵故あのめ〳〵如髪成り能く覚
ゑべ〳〵ととる故知心うづ
覚えありと担ぐ者八義濃国加茂郡虎渓寺の黄のるづ
尾別名吉屋乃事言ふ〳〵と澤八ま着乃動〳〵変せ
十歳程乃成孫と蛇よ言ふゆえ口も倶に言て
其蛇乃腹を切裂ぐ〳〵孫乃頭を乳で〳〵と〳〵支る
中〳〵覚束形ふと事と毛を〳〵底を高か流のぐく

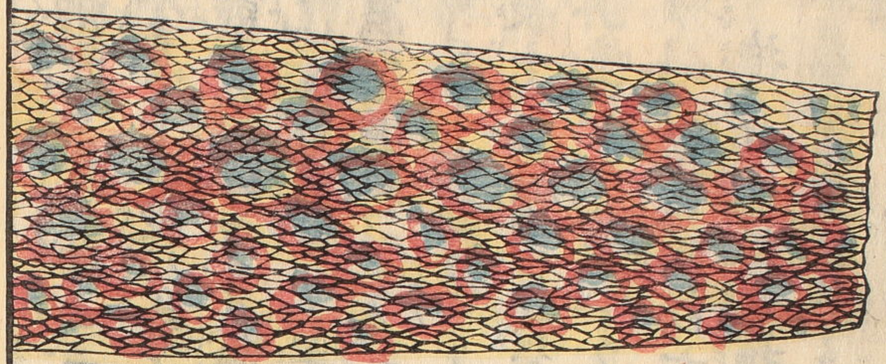
一雜畫

按ニ本草綱目啓蒙ニ蚺蛇ハ和名ニシキヘビ和産詳ナラズ嶺南ノ大蛇ニメ北地ニ産セズ故ニ南蛇ノ名有 中畧ウハバミトハ非ナリウハバミトハ一名ヤマカバチ鈔和名ト訓ズルハ本邦大蛇ノ名ニメ漢名蟒蛇ナリト云ヘリ色ハ青黒ニシテ黄白ノ斑文アリ頭ニ冠アリ頷ニ髯アリ其ノ状ヲ見ル時ハ甚タ恐ロシキ物ナリ又事物紺珠ニ大ニ三囲長十餘丈頷下ニ有髯故名蚺牙長六七寸辟不祥トイヘリ又淮南子ニ猪喙蛇ハ別種ナリト又同種異名ニ

いまゞ兵へ藁ニ乳檀數歳通ニも事ニ記ニ亜爾ニ蚺蛇ハ和名ニシキヘビ和産詳ナラズ嶺南ノ大蛇ニメ北地ニ産セズ故ニ南蛇ノ名有 中畧ウハバミトハ非ナリウハバミトハ一名ヤマカバチ鈔和名ト訓ズルハ本邦大蛇ノ名ニメ漢名蟒蛇ナリト云ヘリ色ハ青黒ニシテ黄白ノ斑文アリ頭ニ冠アリ頷ニ髯アリ其ノ状ヲ見ル時ハ甚タ恐ロシキ物ナリ又事物紺珠ニ大ニ三囲長十餘丈頷下ニ有髯故名蚺牙長六七寸辟不祥トイヘリ又淮南子ニ猪喙蛇ハ別種ナリト又同種異名ニ

胴渡ること地より八首かさゆき
ように見え頭ちいさく
とえ又よく遠ひ〳〵甚溫順な
ざる顔色〳〵歯を細う
そえかゝり〳〵下〳〵ぞうつむき
蔦え絡り肉の方へ生るものを
肉へ〳〵二重巻よえ居る
にのごとく八舌ぞの根よも
その〳〵蔦〳〵も思ひ生ぜ〳〵想像
実利明ることの〳〵八生ものさま
優ることぞ〳〵〳〵大さ〳〵八
常の地のより今より八遠ひえぞまりこけるもの

蝮蛇を和名抄よニシキヘビ
今當る地八色をもの〳〵差
記ゝ蝮蛇を多く載編ゝえ廉
蛇八廉と吾〳〵云事諸書り
廉を追行ける大地もこの蝮
が〳〵山海経り巴蛇呑象〳〵云事も又心安よ巴蛇
長十尋備青黄赤白黒色今蚺蛇其類〳〵まゝ八巴蛇も
蝮蛇もそのよう〳〵似るその又北夢瑣言ゝ曰有一蛇
横斜谷嶺路高七八尺莫知其首尾四面小蛇翼之無數毎
一地身即林木摧折殆旬半方過盡阻行旅〳〵皃ゑえ
小蛇をゝ吾邑〳〵志深世村の古地老
西りける時ゝ林木裂巌栄巻〳〵折倒ふ〳〵云皃ゑもその



類ありや右のウハバミの事を記し
き堆頭と奉書に記したるものの写を外に
若狭より又能登の野坂と云ふ所の
堆より又一条と云ふ所の堆ども
皆同類ぞ西遊記又ハ新著地
理ニハ此類の事を悉く記せざる事
なり

追加

武州橘樹郡川中島字大師の傍を
天保十年巳亥の夏江戸本所回向院の
貝をこの者ども皆ハまき数蛸蛇うるべし
ゆゑ予魁首となり大洋の雲龍真龍の出合を
捕へ来る拍子に着板せる龍の雲水
を記しこれも亦予が画きたるなり二頭ありて
ともに貝をさぐる故萬一常に未だ
見ざる者来らば驚かさぬ為大小も
同じ形ちの画を附けり
方ハ頭大尾細くして
頭の背迄も

胴の色ハ青黒く所々に白き小の字ハ
頭も小く方り吻も細く見えて長く
尻の背格もまるどく〳〵ず〳〵
する雑蛇ハ大よそ形
なるの画よく書うる龍の顔
恐ろ敷顔なるの〳〵思ひの外やさ〳〵柔和なるものよ
見えたり十四の巻に出と載うる蛇背ハ黄
小蛇の尖りる顔多くハ大よそ
生たり絵よく書うる龍の髭ハ頬より生こと雖ども皆ハ
左りにくるくと二度より生たり人畜を飲奥ても髭ハ
皆二度より生るものの〳〵画よく書うる龍のごく頬より生
うるも稀なり其ハ龍ハ何のや如何りも

いつも曲り小蛇ハ小く頭大
書ども二重のもの三重のも生
善悪ともの〳〵思ハ
大切ハ扨もおく大悪ハ
蛇夫〳〵人馬をとり食
うもうハゆく恐敷のものなり
猛敷こと雲ゐ行ハ
事よりもく深山のくも
の善悪と弁へうるものとさうも
先ハ出ざるよう琉球より渡りうる蛇皮線と云もの
ハ蛇を張ある也ハ今
大切る種蛇ハ濱くありこに

蟒蛇も大小ありて濃淡ハ元来大蛇乃色ハ真黒の多く
又赤又白色あるもありて稀なり蟒蛇の事ハ十四の巻
ふも委敷記し並ニ外ふもくに記し置たり
予天保九年戊戌の七月廿五日中山道なる山宿に宿りしに
此夜乃咄しに此辺近き天溪のあたり石宿よりも南の方
山一ツ向ふ（余り高からざる山なれども此辺ハ名のある木あまる山の溪ふて深国の山より八流れ僅の友継らし二里許りも隔りと云）
麓を焼ところ大木を伐出すに（此色ハ樹木繁山なれハ炭にて焼くるも切口尺ばかりの大木とも伐出す事あり）
二十丈も三十丈もありける谷底へ落しあるに此前に白石の
木を取りわるるに大蛇居たるよ驚かり後又く行く
篤く見るよ此大蛇頭砕けて自ら死居たりしとれ是ハ
先に伐落せし材木の木口真逆り巌上へ落たるより頭を
打砕かれたるものと知られたりとぞ其蛇の長さ二丈余有

廻りけれども有なりと云へる故色ハ如何様なるぞと尋ぬるに
赤からざるハ諸目見て来りし者ハあきらかに能吟味せしに
昨日炭を附出したる者乃咄し故今日南宿より態々人に
参りしに大蛇ハ其所に死たり親心ありて祟りをなすもの
とて又山一ツ向ふへ二里計りも遠く取へ捨たりとの事なり
絵に見てし来りけるに善く分りし蒙たり其沿ひなて
山稼となるものも一度も此蛇を見たる者ハなかりけれども
落穂拾ひなど八嶮しき所をみな行の怪物の居たる事を
知り居し也かく怪成事なれども此夜此宿に泊りし人く
来りしものなれバ尋ねしも多くて其夜に僅に聞たる事と
なりしより其後是乃日ふ右宿に雇ひ来りたる人足共の
中にも今日ハ南宿より大勢を催しかの大蛇をとりに

馬もとより事かゝざれバ見物ゝてそうぐよ
當と致し居ります〳〵ざる此業の死とうそも
好き事〳〵ゝ思ふ田向院〳〵見世の角ん
おゝ神谷別の大地の通りうる
き〳〵前よゝ志津野村の大地も
通り道能〳〵ゝる事と吹〳〵
思ひ居るにゝ事を申ゲ知己縣道云り
彼亜りうる話そ申〳〵ぞ業
と〳〵元深山の奥（二三里も
たゝ踏りと〳〵手紙と亜石
み〳〵ハうそぶとハ云ぶ方云
神代よりも希〳〵ぞ乃ゝ
一丈ぐらりとも生繁りうる中をゝの大地乃
亜りうる跡新古武藏もそ中よ乞ハ去年亜りうる跡
とゝを数寸町亜行〳〵うるに方ゝ七尺寸りも濁川
通りたる跡うり援たるぐ〳〵
み〳〵悪〳〵粘居うり彼ぐ毒
粘〳〵池〳〵粘〳〵のや粘ゝ池ぶうり〳〵居うる粘よ自ゝえ
かゝ乃亜り〳〵跡ゝ熊亜右〳〵お切ゝ雑木乃頭も掘切〳〵
ぐ〳〵み〳〵人の亜りもるにゝ其亜り〳〵跡を
茎を冠り〳〵亜るにかゝ
とゝゝ彼地乃大きハ住り
能ゝびの改着ゝ住り
馬ハゆゝとう〳〵住ろ小象と

なり山谷叢樹の間を風雨自ら行き歩行あるごとのみ
實に苦みあるその来る時は地獄さながら
應へ自然と知る故松樵の頓ち勿論他人みづから迎
隔まてゝ出舎ぬ事とぞ水青山の間より湯水澤り
落るのみ大かりしこゝち侍まごとも
悲り見へる者よ出舎まぜゝ
へども格別大成ル中ゝ多くハ居ぬものと見えたり
金を遣ふる精念死ゝ浪去業うる事
英雲遠視尊を拝り
江戸市谷藥王寺の秀雲阿闍梨八十余歳の
因國多部郡小串村 高善寺より三里程の不
なり住持若き時幸寺大和國長谷の学寮に居

の一名武智右乃丞前ゟ右のゟ前斗きの別有る着
来り臓腑ゝゝ吐拓私主前ゟ
時のり変りゟ幸万巻ゝゝ
生命浪り有ゟ大病ゟ及ひ
ゟ時ゟり ゟ金に執着を
添行とのゝやゝ松死ゝ援も
ても敢ゝゝやゝ
ゟゟ浪の世の妨げとも
ゟゝやゝ野送りを
衰落主日来の欲心増長ゝゝ
人知まゞ始寛ちる探ゝ
むりにゝんともまゞ敢さ

こゝに開くに先ゆくもあまり兼しの金を放して此の如く
手首に取付て又出行しくも放し得ず出行とも仕相も
御座なく其内にも寄合教訓をもすれども彼者の
菩提を弔ひは四國修行をもすれども又懺悔りハ罪の
滅せると云事もなしとハ此手の離るゝ佛閣霊地へ参詣
とゝもすれども、かくの如くなり彼死人の手首より
切取りし悪心の心を募りしに罪業深きをいへるも因果
の所行悪しきも目に遭ひしと語るを見てありとぞ
恵澤律師の噂を聞きたる其に秀斎阿闍梨は、さる此の
恵澤と云律師は今より四代程以前の住職なりし此律師の
学業ありし時の事故安永天明の頃の事なりと是も
秀斎阿闍梨申されけり又松前の名舘より二里東大沢村

といふ邊りに小庵あり此庵主ハ木食上人の者なるがそのむかしハ
強悪なりし天狗と成りて發心して六十六部と変じ道心
となりし案内と成て此所へ來りて住居なしけるがその發心の
澤といふハ村内なりし金子僅拾両を酒前後の語りに死前よ
及びて金なり執念を残して死にたる病者の金とて手に握く
持ちたるまゝに臨終なりて搦死して後も右金を放さず
止事を得ずそのまゝ埋葬なしけり此事を彼強悪の
知居て此法窮りし三昧へ行て墓を掘壊き金を取らん
となせども放さゞる低是も力に任せて指を一本づゝこぢ
開きに叶はずして手と放しく二の腕より掘り付たり
出行なれども放さゞる低其場ハ先に死人の腕を捻切
て取り持しも手に離れざるの事なれば頻に其手振り

有りとの事、称佛上人より悪りける前の講くる割符と
合せける如き事なれども、金を貯く勿ても可ある物の
事ハ思の外なきまで満固り、さづつき事なく、後迄す
又く出来る事なく、是に付ても死期に及びくハ金より
執心ハ残りまじく、人へ死人の持行うりとも其金の用を
なさゞるハ誰人もよく知れ居る事也、大集経ニ妻子珍宝
及王位臨命終時無随者ともあれども、千辛万苦して
溜る金故に知り及びくハ愚智に成て執着し、死後
少しも知らぬ事の出来るのを、あんまで長く冥府に
迷ふ種となせしハ残念至極の事也、七珍万宝ハ皆有内
の宝にして、更に其外りて、金を執心を残しまして又
人の溜置る金を貪り取事の悪き事ハいふて八出行成

悪人と能知り居ながら、せし事なれども天罰逃れがたく
来世を待ずして、其報ひ身に報ふ事もまゝあり
積不善の家には余殃あるといふ事故に、己を克して善を
勧め悪を懲し、後の生涯を安穏に送る事、智者と
跡まで賢きまじき事也、是非の事ハ誰人も能知り居る事
なれども、気の付ざる記、源並ぬ今世にて悪に報ひ
の来るハ報ひ方疾く、又生を隔て来世に成て報ひの
来るハ報ひ方遅く来るといへバ、佛説の通り、御報の来る
ざるハ其事重き罪を造る事を慎むべし、経
あきらかに陰悪ハまだ賢き事也、太上感応篇り善悪之
報如影随形とありても、影ハ近く見ゆれバ少しも怠らず
に来る、如雲がある此佛説と同じ事なり

イハナ坊主に化たる事

并鰻同断の事

濃州地乃内信州境なる嶽山乃麓の方へ寄る所ハ家国乃

御領ゆへ川上付知加子母と云村あり是を三ヶ村と云（恵那郡之内）

是濃州乃東北深山の村の極なり　此三ヶ村ハ

毒のこしと云事をして魚を猟する也（五穀の毛の抛まく　山椒のこの所なり）（年伐り石灰と　あし灰とを入せんじ）

（流めの毒丸とうして渕瀬へ流る也り追付渕瀬一面り魚虫毒死するなり方数十丈の　渕ゆくも健寄丸二ツ三ツゆく魚死尽るとなり又其中へ小段と一疋するも毒よ酔り　さる魚頭愈ち蘇生し小げ失るゆゑ毒のこしハ小段と　禁ずる事也然毒の所ハ樫この事ちかゝのなり）

或時若き者ども

山猟りへ出て所の渕を見るに魚多き故に又皿鉢よ

毒揉をなして魚を捕んと今宵乃肴にせんとや逆朝より

其用意を今日し居ける皿ゆも成る頃皆一所に寄集

まりて昼飯を拵居ける所へ何国よりか来りけん坊主一人

来りて其相ちは甚だ魚をとるに毒揉をなさるゝが是ハ

至て無益の事なり外の事ゆく魚を捕えるも有るも何れ

毒揉ハ必ずしくあまたの命をとる殺生の毒流しハよろしからぬ

事に候まゝ以来止めらるべきと言へられバ毒揉ハ魚を取るのに

随分よき事ゆへ漁が根だやしとならんより以後ハ必ず止め申ま

じくと云て突貝しくて皆こ振舞もてなしけるに

情をかけて云ふと云事せしに件の坊主悦び

立去るに則よ之を居て折から団子を喰せ餘りも

何もハ見ともへらぬぬと云に坊主へ与へるよむまそふ

隠より飯も餘りの澤山りハ是もよらせぬへく又

與ふるに嬉んでくべせり其肉にして此ハ汁の跡りも

坊りかけて食にもなべし汁無にして是ハ熱し

なごにて云罵りつゝやゞて村へ抬帰り着きて大勢
の従僕ら彼大笑と料理後を割するにこハ如何に急坊主
ゐ〳〵する当よと初め仮つぶもまだ酔ひ醒めざりし時よりて
かゝる騒動ありと聞まつ〳〵大の笑ひ合せ
ざり〳〵と着よりイハナも坊主り化るとの事右二ヶ
村邑〳〵も右倍侍る事ゆへ〳〵坊主り
化来るもの〳〵と云ハ予が初己中川行某先年彼むへ
久敷勤役の節居〳〵住り安永の性ありし御嶽山の
前後ゆえ大イハナも折節ハ居ることなりと云ハ邑〳〵何ぞゆへ〳〵も右倍ありつゝ坊主り成
と云来る事〳〵予文政二年庚辰の夏木曽路福沢の時
イハナの坊主り成さる事やゝ〳〵耳〳〵尋ねりくるよ

ゐ〳〵人多の内りイハナの坊主の成
さる着ゐ人を見ハ水上御嶽山
より出る行さる川の瀬よて毒流
みゐ弱魚イハナを二尾ハ三尾ハ捕ゆり一
尾ハ小〳〵ちのさ〳〵又大抵ゆりその魚よそその日山中の
魚よ好ハ結〳〵ゐる覚のあら
ず〳〵ハ小〳〵不味ゆえ故その奥そ好見ゆさぞいとゝ
花乃三ヶ村の如〳〵今〳〵同〳〵松成事みゝ〳〵つゞまて云
御嶽山の麓続きさうゞ西と東乃遠ひ故その場所そ
三四十里程酒〳〵ハ全〳〵別の事〳〵猟ハ女〳〵成程を
入道〳〵成猟候ハ老婆〳〵ハイハナそ坊主と

化る者と見えたり　濃州武儀郡の板取川より出る奥之イハナ澤山その
様くに変化ありと聞ゆ
記せり

イハナ　甲州信州ならびに山川より出る奥之ヤマメとよく似
たる魚乍ら頭小く鰓より尾へ斑文を
現然として啓蒙の嘉魚の条よりイハナと
名付しなるべし
津軽一名山窠魚　通雅　渓ノ深渕中ニ産シ巌穴ニ居ル
故ニイハナト名ク形チ鱒魚ニ似テ小ク白色ニメヤ
マベノ如クナル斑紋ナシ又ヤマベハ津軽ノ
方言ニメ京師ニテハアマゴト云一名ミヅグモアメ
ゴ　伊州　イモコ　若州　ヒラツコ　和州　白丹　後ヤ
マコ　同上　卫ノハ　大和本草　雲州ノ　ハ卫ノハ別ナリ　形チ香魚ノ如ク
長サ七八寸身ニ黒斑及細朱点アリ鱗細ナリ奥

州和州及他州ニ産スル者ハ黒斑ノミニメ朱黒ナシ
是廣東新語ノ似嘉魚ナリトゝゝヤマベとイハナとハ
ボラとアカメノ如ク同じ物の如なりヤマメハ滝ノ上に居イハナは瀧ノ下よ
濃州の武儀郡の板取川のヤマメの事
を裏マガリゝゝ云岩川ゝゝ
とぞ又同じ地続き同郡乃郡と川一ツ
アマゴとゝゝ味甚ぢ宜しと三尺以上の大物ありと
アマゴとの人風味鮮乃如ゑ故多り繁る物
諸国とも方云ハ種ゝ形ち
又老媼茶話ニ曰慶長十六年辛亥七月蒲生忠郷寺沢堅高
兵見ん川轟流ゝをゝのへり柿渋摩山椒乃皮家ゝの

民家にて泊まらんと云ふ山里へ旅行の僧夕暮に帰り宿をうる事を喜び泊り出ず有情非情及まで命を惜まざるのなき慈悲や果しなき業報を招かんことを恐れ門へ毒流をうつのみならず何事も廃忘の前へ善根うるべし奥懸の死骨を見るにつけても大導の四恩ふかき事をこそ深く敬ふ事なるに旅僧の志をいたまず門前の流水にも度々洗足せしとや明日の事かねこそ縁なきの上横へやまひ乳よりも先達るは家老の人々

奴豪者も泣ふの笑着もるを拾ひとる便く笑ひへ拾の葉よ栗の俵をとりて旅僧をもてなすを見て僧深く感じ又暁よりこそ出去まり毒類持運び門よりる異類の奥懸死も厠までぬるまで深出るを見り妻女四人斗の鱗落ちるか我の腹をさき見るり栗の俵あるを彼を見てく久べ宿せ旅僧の事を語りるみぞ笑人相をまた坊主八鱗の変化なり事終のく皆く帰まり思ひる国事へ百度の別大地震山崩と會津川乃下の流を梅きぎ洗水り

會津に龍を浸さんとて長尾町野左近某津守
邸中の牧夫を集め色々と指揮し時の潮乃ち
ち柳津の辨才天を勧請し川へ落慶寺の
觀音堂新宮乃拝殿も倒まち其明る年十四日
秀行逝去の伯龍神乃崇りと忽
ちに云ひ今會津藩乃三坂氏の先祖なる三坂越前守
隆景の後覚保年間よりも書き続け元十六巻まで會津乃
事を記し家乃も全書なり安伝八歩行もや多く
傳へ候也記一亜ぬ縷も数百歳を経て八矣よ亜ざる
もの乃七の巻に記し亜る拝殿又蚕流一の事八古くより
大緩の後と見会を爰一
と見えより三代實録元慶六年六月廿日備中国昭
七ヶ條を記載せり中に流蚕捕奥事を禁ぜらる條を
又東福寺文治四年十九日二季彼岸放生會に同所

東国に於て禁断殺生其ほか
法令乃ごとく左も亦蚕ハ古
より蕃流一ハ山蛾乃皮
なりと又ハ章皮 山蛾乃
黄猪或ハ多葉粉乃莖又ハ
仕方乃事一見えより大同小異乃
雷乃降らん事
文政十三年庚寅六月廿九日昇龍
水神となり 事多綱目云 騰蛇化龍神蛇
能乗雲霧而飛遊千里云々
と見えて称一ざるも亜く
水と神となりて志うと雖乃
満珠の遠ひあるに同じからず或ハ

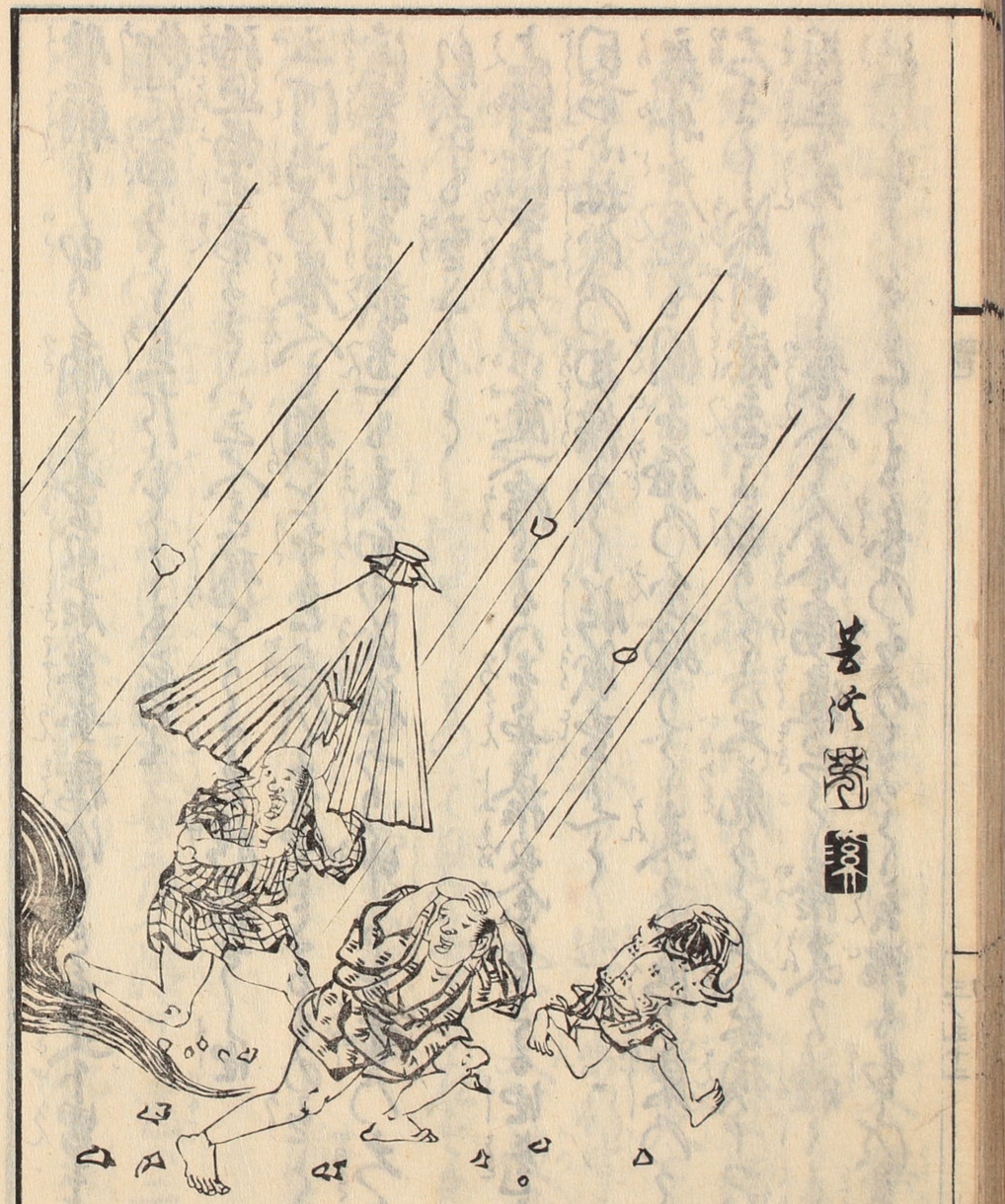
乃記錄もて詳也の〳〵ゑをまた二十九日亀也
計よ室もそ一面り墨もそりうる板のう〳〵雲乃多風の書優よ
かそり市曽亀も雷も雷も舎稲漁〳〵鳴そうめきそり忽ち
雨乃に大豆稲づの跡を更〳〵皆時降そりし水もよ
日雷里深井谷中よ野濱等多又行徳舟橋の
方も墓ご浦〳〵荒そりとそ概器をたよ記も
御幸九亀ハ雹り大豆やごの水更りて降そりと
幸行石原ハ大豆稲のうご落うり回面一ツ日亀ハ周もて稲の
ぶん更りて降傘を破りそりと
市谷大久保四谷赤坂亀も大豆わごうるが落うるよ図表新表ハ
雨計のう〳〵水そ梅〳〵ざりしと
西九十ハ雨計なるよ板囲外もそ豆豆稲のうるが梅りそりと

芝神明亀も雨計りと
汗濱汗殿亀とそ水そ梅〳〵ざりし
小日向亀とそ豆豆稲のうご一帯り
大きうるも数十更り〳〵落〳〵とそ
小石川水門よ亀より白山亀とそ
ゑご出ず稲乃うとそ折〳〵
雷頼之表〳〵歩渡せ〳〵と
上野根岸大塚亀ハ周もて或ハ
業碗稲もつり〳〵畠ハ皆換じたりと
大塚二町 波切不動の表通り 式百〳〵ハ雹よ
お石乃ご〳〵うるバ減よ大歩壕
更に多うる幸うと我勿論初めの稲もそる人も水乃

大小の〳〵思ひ居るが夜彼石〳〵も自ら
動くに拾ひ上るハまゝ寺の事なり
年代記り後堀川院寛喜二年奥州石降如雨
續日本紀ハ光仁帝寶亀七年九月是月毎夜石及
塊自落内竪曹司及京中徃々屋上明而視之其物見
在經二十餘日乃止
五雜俎ハ萬暦壬子十二月廿五日申時四川順慶府安
州無風無雲雷忽震動墜石六塊其一重八斤一重十
五斤一重十七斤小者重一斤或十餘両と見えたり
是ハ同日乃誤りまゝ石の降る事ハ春秋をはじめ
歴史ハもち徃〳〵見えたり
景略ハいまだ其人を詳そせず或人より送来とそ

槌ハ何方へとなく飛去りたるに其ゝ落て響け
たり拾ひ集り珍重覚へ〳〵無雨雲の中へ入事一時も程
もなく雨雲乃中へ入事一時も程
やゝありて又雨雲の中より出て元の所へ落る
大振所ハ高乃峯乃の間亀乃鳴の如
死せり也
予駄本ハ寛延八未年乃夏雨雲乃中より庭へ落
見るに中ハ黒き石の如くも又鉄の如くも又鉛の如
より亜たり解るに法ひう〳〵見るに大黒の形と鋳付
たる古銭と石乃類とも見べくもなく殊乃外ハ
奇〳〵怪〳〵迚漆りハ法見よ形するよ

想山云江戸の雹ハ此末より出たり中禅寺又ハ榛名の
湖水より騰蛇の巻上来る事を見えたり既にこの
水中に居る蛇を中禅寺の湖水中より多く沈み
居る蛇を見えたり毎年七月に到り山禅定とて
人々回峯ほる時此湖上にも舟にて巡り行者まて
賽銭と水中へ投るものも多しとぞ又夫と彼騰
蛇の巻上来りて降せるものと見えたり左もあらバ
不審とするに及ばずども又珍敷事也
又此の事あり板橋の先戸田川迄ハ雨ばかり降来り
たるさまで雹ハ降らず
福山侯本郷丸山の屋敷内伊沢良安宅へ降る雹ハ二百
目程もありて同藩の婦人家根の上より二の腕を打れて
翌朝つもり痛ミ甚敷右良安療治せしと云又下男壱人
足にあたりて足たゝずといへり
駒込富士前にて八三人を頭を打れて怪我せし由
三河島の農人も頭を打れて其上大ひなるものあると
浅草新寺町辺も真向に降り中にも卵の大さ
ばかりもありしと
上野御門主坊の庭へ降る八寸程を拾ひ余りたる由是ハ
同所小林氏の物語なり怪我事なしと
飛鳥山辺も同様の分降りて是より後ハ東の方
大きく降りて八大荒なりて人家損じて後
風巻来りて農人壱人巻揚られて落ちて其の煙に
没しかれども其の辺のものにて云ふ由も知れ難き



まぐ毛も生ざるやうなりこのとき三幸をにて
ひるぞとぞいふ區町もとどもに死傷の異獣落居するもの
お遠の民事を吹田去うぐ
う物ども悪神多くに狂風吹のを
擇ふ記一色うり悪人をこれ
もうちわるこバ當をのもの
おるも多かり既よ弱迹去物居
くるひる者ども結めうくう
にて
却水の流ふる中より越人の記り先年老人の説よ
淀水をふくハ中禅寺乃湖水乃氷とかのたつ巻の龍某
やまふ姉もうりくいふまふ山峯義成乃記り雹ハ

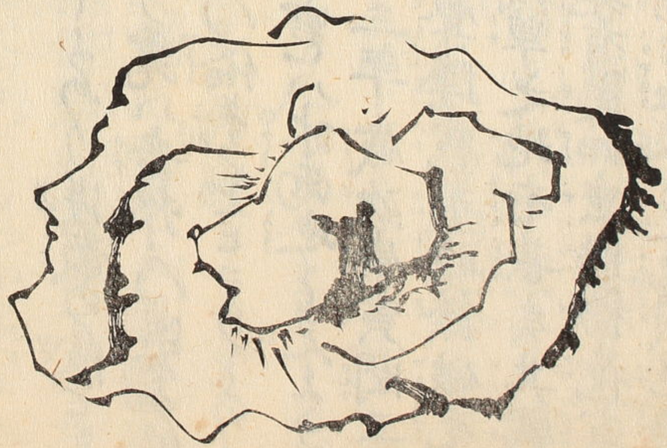
雹ハ毛も狂風事く
皆悪神小日向小石川邊より
もぐ黒雲ふ物もごかり
濱茶壺雷乃者のごとく三軒町へ田原町の
乃家中町なのうく雷獣ぐ落居
三幸をく記ふ又八獨の
ぬく月八龍乃でさものも云今一人その者乃
私を見中さびりぬぐも児童乃見るをよ兎のまう

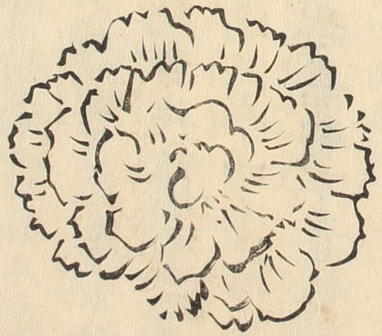
霰つゝひるものゝごとくその雪
天皇三十六年夏四月壬午朝辛卯雹零大如桃子自春至夏早之
四十雨氷
ちそゝ見えつゝ
大城のごとく
俗よきけだし始ハ日光山のごとく
仍東南とさゝ〳〵雹とゝもにふり
駒迎ゐる西教寺の駒山ゞ墓而〳〵
うるハ雪さゝ〳〵梅の花杜丹の花のごとく
是をハ他人の云伝るもうべ
其状ハ亀のごとく児のごとく
ゝや
元史文行志云至元四年四月癸巳清州八里塘雨雹
大過於拳其形有如亀者有如小児者有如獅象者
有如環玦者或橢如卵或圓如弾丸玲瓏有竅白而堅
云々
掬ぶるに湿衿に載る雨の沫多くハ
ゝ編ぶる雨のごとくハ変〳〵たよりのごとくハ
断続の水を含〳〵雹を仕出
侍ぐ竜児童〳〵
菊之雲霄乃至落り
雹ハ含〳〵池中の水を
まろ〳〵雪ゝ雨のおく〳〵さまざま
如る雨隧あるごとく
山乃麓より作る農家

早く知らせ田畑の心がまへをもする事とぞ榛名山よハ
清き流とそ大人成激水の名を水乃名ハ真湖水乃名を水乃
動り中心の解かたさハ雹のごとくにして雹のごとく解かたさハ
雹のごとくにして雹のごとく解かたさハ雹のごとくにして雹のごとく
雹より解初るときハ中心乃ミ氷乃ごとくにして氷のごとく解
養月くつべきもみざるときハ氷乃膠乃ごとくにして氷のごとく
解ものごとくにして日光山乃湖水も同じきものなるべし
雹ハ中禅寺乃湖水乃ごとくにして雹ハ中禅寺乃湖水乃ごとくにして
虚説よりもその驚乃ごとくにして雹ハ墨人常に経験もする所なり云
謝在杭云雹似是霰之大者但雨霰寒而雨雹不寒霰難晴
而雹易晴如驟雨然北方常遇之相傳龍過則雹下四時皆
有余在齊魯四五月間屢見之不必冬也云々ら実よ知言

云々
和訓栞曰新撰字鏡和名抄ニ
名ばくらかし云々霰をもよめり雹ハ霰の俗とすべし
萬葉集に九雪を義訓せり今乃俗ニをヒヨウとよめり
氷雨乃ごとくにして雹ハ氷雨也云々
駒山湖畔雨雹紀事ニ文政十三年歳次庚寅閏三月
念九午後晴天忽然晦冥迅雷両三聲降雹半時餘破瓦穿
屋珠草多敗都下駒籠根津上野淺草之地尤甚矣其雹小
者如梅子栗實大者如拳如拇毎堀有文如重辨梅花或似
牡丹花皆於中心有一堅實如水精白玉外邊絶類花辨東
獄山中所降大者共二三十錢或至五十錢駒籠西教寺裏
所降大者六錢二分或六錢横量二寸三分或三寸皆有花文

乃是千歳之一奇事也曽聞門稗雅ガ曰稚全似玉珠其粒皆三出此唯合小者形不同今所見大而有花文者乃録見聞以傳後世云





又勝田氏乃大雨雹行乃詩甚ご具きたり実まことにさ記ときくも迚来攻及バざる降水ありき哉

大雨雹行

勝田獻

庚寅閏月春盡日節入清和陽景驕向晩天氣忽變更寒感
刺々生迅颯雷公怒撃散硬雨明珠圓轉迸且跳須臾怪雲
蔽四野林谷振動泣山魈大丸小丸破屋瓦千矢萬矢下九
霄鳥雀飛回無處避女兒錯愕互叫囂忽疑馮夷發憤怒手
握神槌碎瓊瑤更怪女媧補天處誤觸列宿墜斗杓別有花
紋爛可愛三出五出巧於描君不聞昔時雨雹如人頭耳目
鼻口婉含嬌天工奇絶不可測甚勝人間費刻彫安知天公
好伎戲別発秘藏慰無聊ヲ人道此物非吉兆陰氣粛殺傷稼
苗誰知大平無事朝縦有災異忽氷消只今四海無一事此
物何足為氛妖雖然祥異天所戒只恐嘉穀不豊饒黙禱皇
天后土舎和氣五風十雨玉燭調

又天保七年丙申夏三百伯耆の國大山より一条の黒雲起り

来りて但馬の國大屋谷へ云一谷へ山間の狹き所なれども
たちまちに九十九童き宇ゐ余小うるハ四五尺程よりして人を
撃我もかうそも野飼の牛を斃うとの事ゑ是ハ
其時其地へ行合居ル何某よりうそ牛の斃うとハ
天滝様なる故多くの雛牛ハ斃うとハ
きく又伯耆の大山より八岡橋一國を渡くくその日ハ
朱藤里も雹ども重過ぎり八拇ほどにて
地面へ来りて新作より降事ゑ八一寸

想山著聞奇集巻の三終